

説林

弓月に就いての考

松田 壽男

勤いたために從來あまり顧られてゐないやうである。小篇もとより一つの試みにすぎないけれども、大方の示教を得て、この問題の解釋に何等か資することができれば、望外の幸福であると思ふ。

一

西域に關する唐代の記録を繙くものは、屢々弓月の二字を、或は城名として、或は部族の名稱として見出すであらうし、また唐の西突厥阿史那賀魯に對する第一次征討軍を率ゐた梁建方や契苾何力が弓月道行軍總管を稱してゐるのにも氣づくことと思ふ。殊に高宗の頃弓月の名を持つた部族が、西域に侵入し初めた吐蕃の勢力と結んで、疎勒や于闐の方面に跳梁したことは、この部の西域史上に於ける或る重要な地位を暗示するにも拘はらず、史料が極めて

西方の天地を震駭せしめた所の阿史那賀魯討滅の役が、漸く顯慶二年（西紀六五七）に至つて終局を告げると、その翌年には一時中絶してゐた安西都護府が復活されて、龜茲に置かれることになつた。かくして西域諸國に對する唐の威信の表示となつてゐた安西都護府も、復置ののち十二年を経た咸亨元年（六七〇）には、吐蕃の侵略を蒙つて又もや廢止されることになつたが、弓月部の活躍は即ちその頃のこ

とである。いま新舊兩唐書の高宗本紀や資治通鑑などに據つて、その活躍の跡をたどつてみると、まづ

[1] 龍朔二年（六六二）十二月、唐將蘇海政の軍が疎勒の南に至つた際、「吐蕃之衆」を引いてこれを脅かして居り、⁽³⁾

[2] 龍朔三年（六六三）十二月には、安西都護の高賢が、兵を率ゐて弓月を撃ち、于闐を救つたことがあり、次いで⁽³⁾

[3] 麟德二年（六六五）閏三月に至ると、弓月及び疎勒が共に吐蕃と結んで于闐を侵したので、西州都督の崔知辯や左武衛將軍の曹繼叔が救援に赴いてゐる。⁽⁴⁾ また舊唐書^{卷五}高宗本紀の

[4] 咸亨四年（六七三）の條を見ると、

十二月丙午。弓月疎勒二國王入朝請降。

とあるが、これは資治通鑑^{卷二}が傳へてゐる如く、唐將蕭嗣業の討伐を懼れた結果に他ならぬ。

以上四つの事件を通じて注目されるのは、第一に

弓月に就いての考

吐蕃との關係であり、第二には、龍朔二年・麟德二年・咸亨四年の三史料に見える疎勒との密接なる關係であつて、これは弓月部の地理上の方位を或程度まで推測せしめるものである。而かもこの部族の根據地に就いて何等的確なる記録のない今日、かくの如き推測と共に最も重要視されねばならないのは、前述咸亨四年に於ける蕭嗣業の弓月討伐の事情を傳へた資治通鑑^{卷二}の次の文であらう。

西突厥興昔亡可汗之世。諸部離散。弓月及阿悉吉皆叛。蘇定方之西討也。擒阿悉吉以歸。弓月南結吐蕃。北招咽麴。共攻疎勒降之。上遣鴻臚卿蕭嗣業發兵討之。嗣業兵未至。弓月懼。與疎勒皆入朝。上赦其罪。遣歸國。

咽麴は咽篋・咽麵などとも書かれ、隋書^{卷八}鐵勒傳には、

得巖海東西。有蘇路羯三素咽。篋促隆忽等諸姓八千餘。

とあつて、得巖海即ち Balkhash Nor⁽⁹⁾ の附近に居た鐵勒 (Turk) の一姓に數へられてゐる。そして唐の高宗の時代に於いても同様に、この湖の東岸に占據してゐたことは、冊府元龜^{卷九} 六四 封冊篇に、

咸亨元年四月。以西突厥首領阿史那都之爲左驍衛大將軍兼匈奴都督。以安輯五咄六及咽麵之衆。

とあるに依つて知られる。何となれば、新唐書^{卷四} 三

地理志に「匈奴都督府」〔註〕以處木昆部置」と記されてゐる如く、匈奴都督府が置かれたのは Ala Kni に注ぐ Emil 河の流域 Chuguchak 地方に比定するべき處木昆部であるから、この地から南方伊犁の盆地に及ぶ西突厥五咄陸〔六〕部と共に、阿史那都之の安輯する所となつた咽麵は、恐らくその西方に接した Balkhash Nor の東岸、Dsungarian Ala-tau

の北麓地方と思はれるからである。また永淳元年 (六八二) には唐の將軍王方翼が伊麗河や熱海 (Issyk Kni) の方面でこの民族と戦つて居るから、今の伊

犁河の下流にもその勢が及んでゐたことが考へられる。

斯く Dsungarian Ala-tau の北麓から伊犁河の下流域に及んでゐた咽麵を北に控え、南は西域に北侵し來つた吐蕃に對して居り、且つ疎勒 (Kashgar) の地方と地理的に關係が深かつたとすると、問題の弓月部の住地は咽麵と疎勒との間、即ち熱海 (Issyk Kni) の附近か、或は此處から Kashgar に至る間道の通過する納林 (Naryn) 河の流域に比擬すべきであらう。

弓月部族の種類に就いても、之を説明する直接の史料がない。しかし前引資治通鑑の文に、西突厥十姓の一なる阿悉吉部其他が、興昔亡可汗即ち阿史那彌射——恐らくは繼往絶可汗阿史那步眞の諱——の下から叛き去つた時に、弓月部も同一の行動をとつたと傳へてゐるのは、元來この部も阿悉吉などと同じく西突厥の一姓であつたことを想像せしめる。更

にこの問題に聯關して注意すべきは、冊府元龜^{卷七}降附篇の

〔開元〕二十七年九月。處木昆旬延闕律賈部落・拔塞幹部落・鼠尼施部落・阿悉吉部落・弓月部落・哥係部落皆遣使。謝恩。請內屬。許之。

といふ記載であらう。「謝恩」といふのは、この文に續けて記されてゐる表文の一節に、

〔陛下〕遐布愍念蒼生。令磧西節度使蓋嘉運。統領兵馬。撫臣遠蕃。誅暴拯危。存恤蕃部。

など見えてゐる如く、この事件のある一月前、即ち開元二十七年八月に磧西節度使の蓋嘉運が突騎施の可汗咄火仙を碎葉城（*Bgh-ab = Tokmak*）の東、賀邏嶺に破つて、これを執へ、突騎施部に一大打撃を加へたことを意味する。換言すれば、如上の一文は、西突厥十姓可汗の勢力の衰頹と共に、代つてその諸部落を併せて碎葉に都し、近隣に暴威を逞しうしてゐた突騎施部が、蓋嘉運の遠征によつて一頓挫を見

弓月に就いての考

たので、從來その下に強壓せられてゐた舊の西突厥の諸姓が、續々と唐に内屬したことを示すものである。文中の處木昆・鼠尼施の兩部落は咄陸部に屬し、拔塞幹・阿悉吉は何れも弩失畢部の一姓であつた。而かもこれら西突厥諸部落のうちに弓月部落の名を見出し得るのは、前述の私見を幾分なりとも證明するものではあるまいか。西突厥の十姓には咄陸・弩失畢の二大別があつて、前者は伊犁河流域及びその北に據り、後者は碎葉地方を首としてその西を占めてゐた。¹³そして咄陸部に屬した五部の名が、現在明かに史上に記されてゐるのに、弩失畢の五姓にあつては、僅かに前掲の阿悉吉・拔塞幹に哥舒を加へた三部名しか知り得ぬのである。¹⁴然らば斯くその名を佚せられた五弩失畢部の二姓は如何なるものであつたらうか。恐らくその一こそは問題の弓月部であつたに相違あるまい。

斯く弓月部族が、元來は西突厥五弩失畢部に所屬

した一姓で Issyk Kul から Naryn 河の流域方面に住んでゐたとすると、續いて考へてみたものはその名稱である。まづ有名な突厥闕特勤 Kul-lig 碑文を見ると、我々は碩學 Thomsen 氏の力によつて、その東側第三十九行目に⁽⁵¹⁾

粟特 (Soydaq) 人をば組織付けんがために、我れ眞珠河 (Jincü ügüz) を渡りて鐵門 (Tamir qapıy) に遠征しぬ。次いで黑姓突騎施 (Qaratürgäs) の民に敵意あり、即ち Kangäras に向ひて進みぬ。

と刻されてゐるのを讀むことが出来る。碑文に謂ふ所の Kangäras は Ibn Khurdādhbih の記録 (844-848 A. D.) に Šās (Tashkend) から Syr-darya の上流にかけて住んでゐたと傳へてある Kankar であり、東羅馬の皇帝コンスタンチン十世 (Konstantinos Porphyrogenetos, 905-959 A. D.) は Pečeneg 族の二に數へた Karycap をまたこれと同じ民族で

あるといはれる。⁽⁵²⁾

更に降つて十三世紀になると、かの幹難・怯綠連兩河の邊に起つた蒙古の勢力が、英傑鐵木眞の指揮を得て次第に西方の諸國を席卷し初めた頃、Aral 海の附近から Syr-darya の下流に亘る平原に游牧してゐた民族に Kangli なるものがあつた。この名は Bretschneider 氏が早くも指摘した如く、金史⁽⁵³⁾卷一忠義傳の粘割韓奴傳に見えるのを始めとして、元の史乘には通常「康里」の二字で寫られてゐる。⁽⁵⁴⁾ また西方の記録に於ては、例へば Rashid-ed-Din の Tarikh-i Ghazāni を初め、Djuyaini の Tarikh-i Djahān Kūshai や、十五世紀に成つた Sharaf-ud-Din の Zafar Nāma、十七世紀の史家 Abul-Gazi Bahadur の書と Shēdjere-i Turki などには夫々 Kankli, Kangli, Kankali, Khanghali などあり、⁽⁵⁵⁾ 又他 Plano Carpini が西紀一二四五年の頃 Comanni 即ち Kipchaks を發つて東のかた Bisermin と

至る間に經た所の Kangitae の國も、また William Rubrugus が一二五三年 Volga から東して到つた所の Cangle など、何れもこれに同じである⁽¹⁸⁾。

然らば問題の弓月の二字が、その音聲に於いて頗るこれらの民族と類似があるのを何人も拒み得ないであらう。何となれば弓字の現音は kung⁽²⁷⁾ の上平聲で、唐書釋音にも父勇切とあるから、唐代の音もこれとあまり異つてはゐなかつたらしく、また月字は現在 yueh と發音されてゐるが、既に先人の説いた如く、古は必ずや ngüt, ngel⁽²⁸⁾ であつたらしく、且つ支那人が外國音を漢字に寫す場合には final R を普通 final ㄩ 或は N に變ずるからである⁽²⁹⁾。

以上 Kangar, Kangü 兩様の名稱に就いて、西歐學者の多くが、時代こそ異なれ、同一の部族として取扱つてゐるのに對して、白鳥博士は、嘗て康居の名義を致へられた際に、⁽³⁰⁾ 兩者を全然別個の民族となし、混同すべきでないと言かれた。これに關して私

は未だその可否を論じ得ないけれど、假りに博士の Kangü 非 Kangar 説に従つて論歩を進めるとしたならば、果して弓月はその孰れに比定せらるべきであらうか。

こゝに於いて先づ注意を惹かれるのは、かの Abu-Gazi の所傳であつて、Kangü 族は十三世紀の頃 Caspi 海の東方、Aral 海や Syr-darya の下流方面に住してゐたけれども、蒙古勃興以前に於ける彼等の根據地はこれと異つてゐて、Issikul 河と Talasch 河の流域であつたといふのである。Issikul 河といふのは現在の Chu 河であり、Talasch 河は明かに Talas 河であるから、それは唐史が五弩失畢部の中心と記す碎葉・咀羅斯の地方に當り、而かも前述弓月部の住地と略ぼ近いことを知るのである。さり乍ら、かくの如き一致によつてのみ論斷せらるべき問題ではないから、私は以下弓月道や弓月城の研究に入つて、出来るだけこれに對して證據を與へ

てみたいと思ふ。

因みに白鳥博士は康居の比擬に際して、これを Kangar, Kangh の何れに宛てゝも、その住域に於て、その音聲に於いて、毫も不都合がないことを立證せられた結果、Kangar の名が「八九世紀の頃より已に西史に現はれたるに反して、Kangh の稱は漸く十三世紀の頃に至りて記録に見えたるを思へば、漢代の康居は寧ろ Kangar に當つるを穩當とす」と説かれた。成る程蒙古時代以前の西方記録に Kangh の名が見えてゐないことは、既に Breitschneider 氏も述べてゐるけれども、思ふに支那の記録では、少くとも唐代に於いてその存在を知ることの出来る證據がある。即ち唐會要^(卷七)馬の項に、諸番「蕃」の馬印を多數に列舉してあつて、その中に、

康曷利馬、印宅。

といふ一條が見えてゐる。これは「康曷利といふ部

族の馬は宅といふ「字に似た」印をつけ「て他と識別す」といふ意味であること、猶ほ沙陁部の馬に就いて、

沙陁馬、印下。

などあるに同じであり、而してこの康曷利といふ部名こそは、明かに Kankali, Kangh の完全なる音譯と認められるからである。斯くして、既に唐代に於いて Kangh 部族の存在を明かにする時は、「元史譯文證補」の著者として名高い洪鈞氏や或は露國の翰林學士 Radloff 氏などの唱へた康居即ち Kangh (康里) 説もまた無下に排斥し得べきではなく、同時に突厥碑文の Kangars と後世の Kangh との關係に對しても、多少の解決の光明を認めることが出来る。

弓月といふ名稱が始めて唐の史乘に現はれたの

は、かの第一次阿史那賀魯征討の際の記録である。
この役は舊唐書^{四卷}高宗本紀、永徽二年（西紀六五一）
の條に、

秋七月丁未。賀魯寇。陷金嶺城蒲類縣。遣武候
大將軍梁建方・右驍衛大將軍契苾何力爲弓月道
總管。以討之。

とあるもので、その經過は同書の同じ紀に、翌永徽
三年春正月癸亥に繋げて、

弓月道總管梁建方・契苾何力等大破處月朱耶孤
注於牢山。斬首九千級。虜渠帥六千。俘生口萬
餘。獲牛馬雜畜七萬。

と述べてあるのを初め、新唐書^{三卷}高宗本紀、新舊唐
書西突厥傳<sup>舊書卷一九四下
新書卷二二五下</sup>阿史那賀魯の條、新唐書^{二卷}

ハ沙陀傳など色々な記録に見出すことができるが、
就中最も詳かに知り得るのは、新舊唐書の契苾何力
傳<sup>舊書卷二〇九
新書卷二二〇</sup>であつて、それによると、弓月道行軍
は單に處月部の酋長の朱耶孤注を敗死せしめたのみ

弓月に就いての考

ならず、進んで處密部に至り、その部の時建俟斤合
支賀をも擒へて歸來したといふ。但し舊唐書の契苾
何力傳には出兵の原因を「處月處密叛」と書いてあ
るが、兩部謀叛の背後に賀魯のあつたことを閑却す
べきではないから、新唐書の方に「西突厥阿史那賀
魯以處月・處密・姑蘇・歌羅祿・卑失・五姓叛。寇
延〔廷〕州。陷金嶺・蒲類」とあるを正しとすべきで
ある。また舊唐書の阿史那賀魯傳にはこの役を、

〔永徽〕三年。詔遣左武衛大將軍梁建方・右驍衛
大將軍契苾何力。率燕然都護所部廻紇兵五萬騎
討之。前後斬首五千級。虜渠帥六十餘人。

と記してあるが、末尾の一句は阿史那賀魯に與へた
直接の打撃を示すものではなくて、實は處月・處密
兩部討伐の成果にすぎず、また永徽三年は出兵の年
ではなくて、處月との戦役のあつた年であることが
前掲諸書の對比によつて知られる。

さてこの弓月道行軍の進路を知るには、先づ處月・

處密兩部の住地を定めておく必要がある。嘗て Schlegel 氏が處月の位置を Talas 及び Lob Nor の兩處であると説いたのは、Chavannes 氏が指摘してゐる如く確かに誤であるが、從來この部の住地を云ふもの、多くは新唐書沙陀傳にこの部の由來を示して、處月居金娑山之陽。蒲類之東。有大磧。名沙陀。故號沙陀突厥云。

とあるに基き、蒲類海 (Barkul) の東に齎するのである。併し乍らこの説は處月と沙陀との關係を究めなければ容易に首肯し得ぬ所であつて、而かも舊唐書西突厥傳に、

咄陸 ○乙昆咄陸可汗
Gobul 在位 又遣處月・處密等圍天山縣。

○今 ○今
G. Turan 郭恪 ○安西都
護郭孝恪 又擊走之。〔孝〕恪乘勝

進拔處月俟斤所居之城。追奔及於曷索山。

○新唐書 過索山作斬首千餘級。降其處密之衆而歸。

とか、または新唐書 卷四
三下 地理志に、

金滿州都督府。〔註〕永徽五年以處月部落置。爲

州。隸輪臺。龍朔二年爲府。

とあるのを案ずると、少くとも太宗高宗の時代に於ける彼等の根據は、未だ斯の如く東に偏してゐたとは考へられぬ。即ち皇輿西域圖志が「迪化州 (Urumchi) 以東。博克達鄂拉 (Bogdo Ola) 以北之地」に比し、これを沙陀の故境と説いた所以である。處月と沙陀との關係を別問題として、この比定はかなり真相を得てゐるやうに思はれるが、圖志の理由は極めて薄弱である上に、全卷を通じて、編者は常に一定した所信を持つてゐないのは遺憾である。また Chavannes 氏は圖志の説を根底として、處月を庭州金滿縣治後の北庭都護府城（今之濟木薩 Dsim-sai）附近に置いてゐる。これは前引地理志の文に見えた金滿州都督府を金滿縣と同地と考へた結果であるが、この見解には尙ほ考ふべき幾多の問題がある。例へば同じ文中にある「隸輪臺」の一句の如きは、若しこれを庭州輪臺縣即ち今の烏魯木齊 (Urum-

(三)と見るならば、明かに矛盾を生ずるなど、その一端であらう。斯く處月の方位に關して從來枚舉せられた資料は何れも絶對的の根據とならないから、私は次に一證據を提示して、これを解決しよう。

近時西域の地から發見された多數の古文書類のうち、西州圖經の殘卷⁽¹⁴⁾があつて、その中には西州地方から各地に到達する十一の通路が示されてゐる。そのうち當面の問題に就いて特に注意したいのは、西州交河縣 (Turpan の西の Yarkhoto 廢址) から北方に向ふ、次の二道である。即ち十一道の第九及び第十として、

他地道

右道出交河縣界。至西北向柳谷。通庭州四百五十里。足水草。唯通人馬。

白水澗道

右道出交河縣界、西北向處月已西諸蕃。足水草。通車馬。

弓月に就いての考

とあるのがそれである。他地道は明かに新唐書⁽¹⁵⁾地理志、西州交河縣の原註に、

自縣北八十里。有龍泉館。又北入谷。百三十里經柳谷。渡金沙嶺。百六十里經石會漢戍。至北庭都護府城。

とあるのに相當し、元和郡縣志⁽¹⁶⁾西州の條に、

北自金婆嶺至北庭都護府五百里。
と記されてゐるのも、また宋の世に高昌に使した王延德⁽¹⁷⁾が交河州 (Yarkhoto) から金嶺を越えて北庭に至つた時の通路もこれであつたに違ひなく、金嶺・金婆嶺・金沙嶺は何れも等しく、今尙ほ俗に金嶺と呼ばれる所の Dshuwan-terek-bashi Oia⁽¹⁸⁾である。かくの如く他地道は Yarkhoto (交河縣) から、西北し、次いで北に折れ、Yulgun-terek Dawan によつて天山山脈の一峰 Dshuwan-terek-bashi Oia を越え、Dsimar 地方 (庭州治) に至るものであると考へられるから、従つて白水澗道は通典⁽¹⁹⁾七四州郡四交

河郡の項に、

西北到北庭輪臺縣五百四十里。

とあるに同じであることが明瞭となるであらう。然らば西州圖經の謂ふ「處月已西諸蕃」は當に庭州の一縣たる輪臺縣 (Urumchi) 以西の地方でなければならぬ。従つて處月の住地は輪臺縣以東、金滿縣以西、極言すれば今の Urumchi 附近に比定せらるべきである。こゝに於いて處月が天山縣 (Tianshan, 西州五縣の一) を圍んだことも、金滿州都督府が輪臺に隸したといふ疑問も釋然とするのみならず、前述の梁建方等が處月を伐つた際、その酋長の朱耶孤注が據つたといはれる「牢山」は實に隋書の所謂貪汗山⁴⁴即ち今日の Bogdo Oia でなければならぬことになるのである⁴⁵。

次に新唐書の契苾何力傳によれば、彼が弓月道行軍總管として、處月部の朱耶孤注を牢山に討つたのち、その遁走を追ふこと五百里で彼等を破つたが、

その時處密部の時健俟斤等をも俘へたとあるから、處月慘敗の地は即ち處密の住地ではなかつたらうか。また前引舊唐書西突厥傳の一節に、郭孝恪が「處月俟斤所居之城」を抜いてのち、曷索山に至り「其處密之衆」を降して歸つたとあるによれば、曷索山は處密部の根據と密接な關係にあつたこと推測に難くない。時こそ違へ、略ぼ同様な經過をもつ如上兩戰役の記録から察すると、皇輿西域圖志^{卷二}が哈屯博克達鄂拉 (Kaim-bogdo Oia) を以つて曷索山と説いてゐるのは、正しく肯綮に中つてゐると申さねばならぬ。恐らくこの山から北流する瑪納斯 (Manas) 烏蘭烏蘇 (Ulan-ussu) 兩河の邊こそ、處密部の住地に外あるまじ。

要するに、高宗の永徽二年に、西突厥の阿史那賀魯を膺懲する爲め、秦・成・岐・雍の府兵と回紇の騎兵を併せ率ゐて西⁴⁶に向つた梁建方及び契苾何力は、まづ烏魯木齊 (Urumchi) 地方に處月部を討ち、

その遁走を追つて瑪納斯 (Mamas) 地方に至り、此處で處月部に徹底的な打撃を與へると共に、處密部をも降したのではあるが、結局阿史那賀魯に對しては何等直接の損傷を與へることなしに歸つたのである。

然らばこの行軍に際し、何が故に彼等は弓月道總管を稱したのであらうか。元の胡三省はこの役の顛末を述べた資治通鑑の一條 卷一九九高宗紀 永徽二年七月 に於いて、弓月道に註するに、

弓月城在庭州西千有餘里。

の一句を以つてしてゐる。蓋し彼等の目的が弓月城にあつたがためと解したのである。果して然るか否か。暫く弓月城の方位に就いて攷へてみよう。

三

弓月城の名を見出すことのできる二三の記録のうち、その方位を最もよく示してゐるものとして、先

弓月に就いての考

づ新唐書 卷四 地理志を擧げなければならぬ。即ち同志、北庭大都護府の條の原註に、庭州後の北庭府、Dimasur (附近) から西して碎葉の 卷四 (S. 36) 地方に至る孔道——元和郡縣志 卷四 庭州の條下に謂ふ所の碎葉路——を記し、その一節に、

又渡黑水七十里有黑水守捉。又七十里有東林守捉。又七十里有西林守捉。又經黃草泊・大漠・小磧。渡石漆河。踰車嶺。至弓月城。過思渾川。熱失蜜城。渡伊麗河。一名帝帝河。至碎葉界。又西行千里至碎葉城。

とあるのがそれである。黑水とは現在トルコ語で黑水を意味する喀喇烏蘇 (Kara-suu) であるらしく、從つて黑水及び東林・西林の三守捉の位置は、庫爾喀喇烏蘇・多木達喀喇烏蘇・固爾岡喀喇烏蘇の所謂三喀喇烏蘇の流域に求めらるべきであり、黃草泊は徐松氏が説明した如く固爾岡喀喇烏蘇軍臺から西北して叢葦の中を行く邊であらうし、大漠・小磧は更

にその西北に連つた沙阜、即ち長春真人西遊記に「沙場」に相當する。故に庭州から輪臺縣 (Urumchi)・張堡城守捉 (Changji・昌吉)・清鎮軍城 (Malinas) などを経た唐書の碎葉路は、更に西のかた三喀喇烏蘇を渡り、Kara-tala-esik Nor 即ち Ebi Nor の南岸地方に及んでゐるのであつて、それは大體から言つて、長春真人の往路の一部と大差がない。また碎葉城から少くとも一千里の東に置かれてゐる伊麗河一に帝帝河は、恐らく長春真人を初め、元時の有名な旅行家の渡河した箇所と同じく、いま察林 (Chalin) 河が伊犁河に注ぎ入る附近であらう。さう乍ら、大漠・小磧から伊麗河に達する間に示されてゐる一嶺二河二城が一體今の奈邊に當るかは、なほ未だ確定を見ないのである。李光廷氏はその著漢西域圖考^三に唐書のこの文を引き、石漆河を今の品河、車嶺を登努勒臺山 (恐らく Zitarle Pass)、「弓月城を」在哈什 (Kash) 河北」思渾川を「即哈什河」と註し

てゐる。けれどもこれは別に確かな根據があるわけではなく、たゞ徐松氏が石漆河の石と品河の品との音聲の類似から得た單なる思ひ附きに從つたにすぎない。Chavannes 氏もまたこれを祖述してゐる。けれどもこの道は伊犁に出るものとしては甚だ迂遠であり、且つ哈什河の北岸はかの Borokhoro 山脈の裾が急に河に迫つて、地勢頗る狹隘であるから、少くとも唐代に於いて、この方面の中心都會であつたらしい弓月城をかゝる地點に求める考説に對して私は絶対に賛意を表することができない。Ebi Nor の南邊から南のかた Borokhoro 山脈を越えて所謂伊犁九城の地方に至るには少くとも二つの主要な通路がある。一は Kysenshek 河或は Borogobosun 河に由つて寧遠城 (固爾札・Kulja) 惠寧城 (巴彥岱・Bayantai) 附近に達するものであり、二は Sairam Nor の南岸に沿ひ、塔爾奇嶺 (Talchi pass) を經、同名の河に沿つて南に下り、塔爾奇城・綏定城・惠遠

城の地方に出るものであつて、例の長春真人や劉郁・耶律楚材等の取つた途もこれであつた。そして私は問題の唐書の道程もその孰れかでなければならぬと考へるから、結局、弓月城は Talt, Kundja 兩城によつて代表される地域のうちに求めてこそ然るべきを信ずるのである。第十二・三・四世紀の頃伊犁の中心城市として有名なる阿里馬城⁽³⁾(阿力麻里・Almalik) も同じくこの地域のうちに求めらるべきであるから、王國維氏が弓月城をこの城に比した⁽³⁾のは寔に穩當な考説と言はなければならぬ。

さて西突厥の盛時、弓月城を中心として今の伊犁河上流の盆地に占據してゐたのは恐らく突騎施部であつたらしい。それは西突厥の五咄陸部のうち、この部を除いた他の四部、即ち處木昆・鼠尼施・攝舍提・胡祿屋の住地が大體から見て伊犁盆地以外であつたこと、且つこれらの咄陸部は弩矢畢の五部と伊犁河の西を以つて境となし、その東方に散居してゐ

たことなどから知られるであらう。

以上の推察はまた突騎施部南遷の史實からも裏書され、そしてその記録のうちに再び弓月城の名を見出し得るのである。新舊唐書西突厥傳には突騎施部の首領、烏質勒の傳が附載されてゐる。これによると突騎施烏質勒は初め西突厥の斛瑟羅の下に屬してゐたが、斛瑟羅が「用刑嚴酷」で下衆に畏れられたのを巧みに利用して、忽ち遠近の諸胡を歸附せしめて強盛となつたが、やがて南のかた碎葉城を奪つたことを敍して、

屯碎葉西北。稍攻得碎葉。卽徙其牙居之。謂碎葉川爲大牙。弓月城・伊麗水爲小牙。其地東隣北突厥。西諸胡。東直西廷州。盡并斛瑟羅地。

と傳へてゐる。その結果斛瑟羅は奔つて唐に歸服するに至つたが、これは中宗の嗣聖七年(則天天授元年、西紀六九〇)であつた。こゝに引用した一文を以つてしてすら、この部が如何なる發展を遂げたかは

知るに難くないが、なほ杜環の經行記のうちに、⁵⁸⁾

從安西(龜茲)西北千餘里有勃達嶺(Betal Pass)。嶺南是大唐北界。嶺北是突騎施南界。

とあるのは、その南界が Naryn 河の流域にまで及んでゐたことを示し、また舊唐書地理志^{卷四}○安西都護府の條に、

北至突騎施界鴈沙川一千里。

と見えてゐるのは、⁵⁹⁾その東境が龜茲(Kucha)の北 Yulduz にあつたことを語つてゐる。而かも Naryn 河の流域は前述弓月部の住地であり、Yulduz の溪谷に居たのは鼠尼施部であつたといふのは、頗る我が注意を惹くのである。然らばかくの如き廣汎なる疆域は實に中宗の嗣聖年間に於ける烏質勒の開拓に歸すべきであり、また玄宗の開元二十七年に、蓋嘉運遠征の結果として唐に内屬を請うたと冊府元龜が記す弓月・鼠尼施を初め西突厥の諸姓が、突騎施部に服屬するに至つたのも、またその際であつた

らう。

開元二十七年、突騎施可汗咄火仙が積西節度使蓋嘉運のために碎葉城の附近に捕へられたといふ所傳は、當時、この部の牙庭が碎葉城にあつたことを明かにし、且つこの形勢は烏質勒によつて開かれたことと論を俟たない。さり乍ら同時に小牙として保たれた弓月城や伊麗水に就いてはなほ二三の言を費さなければならぬ。皇輿西域圖志^{卷十}三 什巴爾圖和碩の項を見ると、前引突騎施烏質勒傳の一節を解釋して、然れども烏質勒傳を考ふるに、改めて碎葉を得たる後、碎葉水を以つて大牙となし、伊麗水を小牙となす。疑ふらくは當時烏質勒舊と伊麗水上に屯し、西のかた攻めて碎葉を得、徙つて大牙と爲す。因つて舊屯を以つて小牙と爲せしなり。「烏質勒傳には「屯碎葉西北」とあれど」即ち舊屯は當に碎葉の東北に在るべし。

といひ、伊麗水即ち察林(Chin)渡の附近を以つて

烏質勒の舊牙と見做してゐるのは、従ふべき卓見といはねばならぬ。併し乍ら烏質勒の小牙は決して伊麗水のみではなくて、更にその東に於ける弓月城もまたその際に同等の地位を與へられたことを忘れてはならない。この推測を導く一例を擧げるならば、
通典^{卷一七二}州郡序目や舊唐書^{卷三八}地理志の序には突騎施の牙帳を「在北庭府西北三千餘里」と傳へ、また通典^{卷一七四}州郡北庭府の項にその八到を掲げて「西至突騎施三千六百八十里」とか「西北到突騎施三千一百八十里」などと記してゐる。これら諸條にあらはれた里數は多少出入があるが大體から云つて、北庭都護府城から西に走つて碎葉城に到る所謂碎葉路の全長と考へて差支へない。然るに若し舊唐書^{卷四〇}地理志を開いて、北庭府の條が示してゐるその里數を見るならば、以上と全く違つて「西至突騎施庭一千六百里」とあるのに注目されるであらう。一千を三千の誤とすれば兎も角、もしこの所傳を信ずるなら

弓月に就いての考

ば、こゝに見はれた突騎施の牙庭は勿論碎葉ではなく、さりとてその東方約千里を距てた伊麗水のそれでもなく、恐らくは胡三省が「弓月城在庭州西千有餘里」と概算したやうに、伊犁盆地に於ける弓月城を指すらしいからである。蓋し西域圖志が突騎施の小牙を一處しか考慮してゐないのは、問題の一句を「謂^三碎葉川爲^二大牙弓月城^一。伊麗水爲^二小牙^一」と讀んだためである。この讀み方に従ふならば、碎葉水畔の大牙は突騎施の占據によつて弓月城と稱せられたことになり、弓月城と突騎施部とが如何に密接な關係にあつたかを思はしめるが、併しこれは圖志の杜撰であつて、むしろ李光弼氏に從つて「碎葉川を謂つて大牙となす。弓月城^①「及び」伊麗水を小牙となし」たと解すべきであらう。

要するに西曆第七世紀の末、西突厥十姓可汗の威信の失墜と共に、烏質勒による突騎施部の大發展が行はれた。その際に碎葉水畔には突騎施の新牙が營

まれて、爾來この部族の勢力の中心となつたが、同時に伊麗水及び弓月城は小牙として保たれることになつた。この三つの牙庭は突騎施部南遷の經路を示すものとして注意すべきであつて、伊麗水畔のそれは碎葉占據以前の舊牙であり、またそれよりも東方に於ける弓月城は更に古い頃の牙庭であつたに相違ない。換言すれば、今の伊犁九城の地に築かれてゐた弓月城は、恐らく突騎施部が西突厥五咄陸部の一姓として伊犁河上流域に居た頃その中心地であつて、南遷の後も依然小牙として特別な注意の下に保たれたのであらう。

かくの如く弓月城が、突騎施部にとつて、ひいては西突厥にとつて、非常に重要視されてゐたことを思ふ時は、梁建方や契苾何力の率ゐた弓月道行軍の目的は直ちに了解されよう。然し乍ら一方この行軍が西突厥沙鉢羅可汗阿史那賀魯の討滅を旗印としたとすると、一體阿史那賀魯と弓月城とは如何なる關

係を持つか。次に來るべき問題はこれである。

四

阿史那賀魯はもと西突厥の乙昆咄陸可汗の葉護 (Yabghu) であつたが、貞觀十六年 (西紀六四二)、その主咄陸可汗が唐の冊立した乙昆射匭可汗のため國を追はれると共に、彼もまた壓迫に堪へずして唐に奔つたのである。唐の太宗はその内屬を許し、貞觀二十二年の春、彼を瑤池都督に封じて庭州の地に安堵せしめたが、唐と乙昆射匭可汗との親交を快しとしなかつた彼は、封冊を受けた翌年に至り、太宗の崩御を機として忽ち叛を企て、西のかた乙昆射匭可汗の所領を併呑して沙鉢羅可汗と號し、西・庭兩州の奪取をさへ盡るに至つた。^(註)これは高宗の永徽元年 (西紀六五〇) 十二月から翌二年の初めにかけての事件であつて、弓月道行軍は即ちその結果としての出兵であつた。

さて獨立後に於ける賀魯の動靜をかなり詳かに知ることのできるのは、新舊兩唐書の西突厥傳の記述であるが、就中舊唐書は、

永徽二年。「阿史那賀魯」與其子咄運率衆西遁。

據咄陸可汗之地。總有西域諸郡。建牙于雙河及千泉。自號沙鉢羅可汗。統攝咄陸弩失畢十姓。

といふ一文を掲げて、咄陸部弩失畢部の十姓を統治すべき牙庭を雙河及び千泉の兩處に選んだと傳へてゐる。千泉は申すまでもなく玄奘が素葉(Ṣaṣṣa)城の西四百餘里、咀邏私(Talas)城の東百四五十里に位してゐたと記す地方で、今の Alexander 山脈の北麓に當るのであるが、雙河の方位は明かでない、従つて現在少くとも次の二説を見るのである。一は伊麗水以東説ともいふべきであつて、即ち皇輿西域圖志が鄂拓克賽里郭勒と庫色木蘇克郭勒の二河を容れて、布勒哈齊淖爾即ち喀喇塔拉額西柯淖爾(Kara-tala-esik Nor; Ebi Nor)に注ぐ所の博羅塔拉(Bo-

弓月に就いての考

rolata) 河に宛て、或は辛卯侍行記の著者陶保廉氏が、精河(Jing-ho)博羅塔拉(Borolata)兩河の間と案じたのがそれである。二は伊麗水以西説とも稱すべく、丁謙氏が新唐書突厥傳地理攷證のうちに述べてゐる。丁謙氏の説は寔に咄ふべき臆斷を根據としてゐるから、毫も信憑し難いものであるが、さりとて Borolata 論者の示した理由も極めて薄弱であつて、なほ推測の域を脱し得ないものがあるから、雙河の比定に關しては改めて慎重なる考慮を費さねばならぬのである。また一方胡三省は資治通鑑一卷九永徽二年の條に見えた雙河に對して「自雙河西南抵賀魯牙帳二百里」と註してゐる。これは明かに新唐書の西突厥傳阿史那賀魯の條に据つたものであるが、若しさうだとすると、前引舊唐書の文に、賀魯の牙庭の一として雙河が擧げてあるのと二百里の相違を來すことになる。何れにせよ賀魯の根據地を知るためには雙河の問題を解決する必要があり、雙河

の方位如何は實に顯慶二年（西紀六五七）に起された唐の第三次阿史那賀魯討滅役の記録に俟たなければならぬのである。

この戦役の経過を最も詳しく傳へてゐるのは、新舊兩唐書の西突厥傳阿史那賀魯の項及び同じく兩書の蘇定方傳である。^(註)けれどもこの四傳の間には相互に多少出入があるのみならず、夫々の敘述にはかなりの錯雜と矛盾とがあつて、真相を把握するに甚だ努力を要する。何故かといふと、元來この戦役は、

(一)伊麗道行軍大總管として、燕然都護の任雅相、同副都護の蕭嗣業及び瀚海都督の廻紇婆閏等を統率した蘇定方の行軍。

(二)流沙道安撫大使に任ぜられた西突厥の阿史那彌射（後の興昔亡可汗）及び阿史那步真（後の繼往絕可汗）の行軍。

(三)阿史那賀魯に徹底的打撃を與へてのち、本軍を離れてこれを追討し、虜獲した蕭嗣業及び廻紇婆

閏の行軍。

の三行軍の活躍によつて構成されてゐるにも拘はらず、兩唐書の編者はその間の區別を等閑に附し、只その得た資料を無批判に結合させたからであらう。

されば如上四傳の一々を分解し對比し、批判を加へてみることは確かに興味があり、且つ必要なことでもあるが、記述の煩雜が論旨の透徹を妨げるのを恐れて、いまは當面の問題に關係のある部分に觸れるのみに止めよう。

まづ新唐書阿史那賀魯傳をみると、伊麗道行軍大總管並びに流沙道安撫大使の任命を述べてのち、直ちに、

分出金山道。俟斤嫩獨祿等萬餘帳迎降。定方以精騎至曳咥河西。擊處木昆破之。賀魯舉十姓兵十萬騎來拒。定方以萬人當之。云々。

と記してある。これに相當すべき舊唐書蘇定方傳の所傳は、

〔定方〕自金山之北指處木昆部落。大破之。其倭斤嬭獨祿以衆萬餘帳來降。定方撫之。發其千騎進至突騎施部。新唐書改作進至曳咥河

であつて、次文に賀魯の來拒を述べてゐる。兩所傳を對照してみると、嬭獨祿といふ倭斤の來降と處木昆部落を擊破したことが前後してゐるし、また定方と賀魯との最初の交戦を一は處木昆部と傳へ、一は突騎施部に於ける如く書いてあるが、大體から見ても、蘇定方の軍が金山を経て處木昆部に向つたことは相一致してゐる。處木昆部落の方位は皇輿西域圖志の説を示した如く Tarbagatai 山脈の南、Chung-chak を中心とする Emil 河の流域であり、金山は突厥碑文の Altun jys y' Kara-Irtysh 及び Uluungu 兩河の發源する部分に於ける Alai 山脈である。⁽²⁾ところが舊唐書の阿史那賀魯傳に於ては、

定方行至曳咥河西。賀魯率胡祿居闕曷等二萬餘騎。列陣而待。

弓月に就いての考

とあつて、金山はおろか、處木昆部との戦すら見えないのである。然らば曳咥河とは何處であらうか。これが蘇定方軍の進路を解く重大な鍵鑰の一つである。皇輿西域圖志はこの曳咥河を額彬格遜淖爾 (Ebin-ge-sun Nor) 即ち Ayar Nor に宛て、陶保廉氏は辛卯侍行記に於いて「蓋也兒的石 (Irtysh) 河之在俄屬斜米省北者也」と推定してゐるが、私はこの河名こそ突厥闕特勤碑文に見えた *arūs ügüz* の音譯にすぎず、從つて今の Kara-Irtysh 河を指したのに相違あるまいと確信するのである。但し碑文の他の部分に示された *jineu ügüz* を支那人が眞珠河と寫してゐる如く、突厥語で河を意味する *ügüz* に對してのみ義譯を施してゐること申すまでもなす。曳字は現在 *ye* と發音されるが、古音は恐らく *yet*, *yit* であつたらしいから、この字を以つて *y* の音を寫したことは極めて明瞭であつて、九姓鐵勒の一姓たる拔曳固を、同じ碑文に *beiyinqu* と書いてあるのも

その一體と云へよう。然らば舊唐書賀魯傳は處木昆部擊破の記事を脱したのであり、新唐書蘇定方傳が舊書の「至突騎施部」を改めて「至曳咥河」に作つたのは、甚だしい杜撰といふべく、且つ曳咥河は當に金山・處木昆部の中間に置かれねばならないのである。かう考へてくると、蘇定方の行軍路は、年代こそ異なれ、やはり突厥闕特勤碑の東面第三十六行から三十七行にかけて、

同じ年○闕特勤第卅六年に、我等は金山 (altun jys) を

登り、イルティシニ河 (artis tugiz) を渡りて、

突騎施族 (turgas) に向ひて進軍しぬ。

と刻まれてゐる闕特勤のそれに同じであつたことが漸く明かになつてくる。

如上兩唐書の二節に關係して、更に指摘しておきたいのは、新唐書賀魯傳から引いた文の冒頭に「分出金山道」とある一句である。一體新唐書の編者は如何なる意味で分出といふ文字を使つたのである

か。冊府元龜卷九八外臣部一征討篇第五を見ると、同じくこの戦役の記事を載せてあるが、その始めに兩軍の出發を述べて、

蘇定方爲大總管。領廻紇等兵。與阿史那彌射・步眞等分出西州・金城兩道。以經略之。

といひ、また同じ書の卷九七三一八外臣部助國討伐篇にも同じ所傳が收められてあつて、これには「分出西州・金山兩道」に作つてある。即ち征討篇の金城が金山の譌たる明かであると共に、新唐書の一句も當に斯く作るを正しとすべきであつて、蘇定方の率ゐた伊麗道行軍が金山 (Altai) から西して曳咥河 (Kara-Itysu) を渡り、Enli 河の流域で處木昆部を粉碎したのに對して、流沙道安撫大使阿史那彌射及び歩眞の出發地は西州即ちもとの高昌 (Kara-khodjo) であつたことが確められる。舊唐書西突厥傳に收められてゐる阿史那彌射傳を繙くと、唐の高宗が戦後彼及び歩眞を冊立する際に降した詔が見出されるが、

そのうちに、

上略 故遣右屯衛將軍蘇定方等。統率騎勇。北路討逐。卿等宣暢朝風。南道撫育。下略

とあつて、北路・南道の區別があるのはこの故である。斯く南北相並んで軍を西に進めたのであるが、兩者は全く無關係に終つたのではない。舊唐書は碎葉水に賀魯を攻めるに當つて兩軍の協力を説き、新唐書はこの交戦より以前、既に問題の雙河に於いて兩者軍を合せたのであると記録してゐる。こゝに至つて問題は愈々深まつて行くのであるから、豫め次に新唐書阿史那賀魯傳を例に採つて、必要な部分を提示しておく。

〔A〕定方命〔蕭〕嗣業・〔廻紇〕婆閭趨邪羅斯川追虜。任雅相提降兵踵後。

〔B〕會大雪。軍中請須霽。定方曰。今霽晦風烈。虜謂我不能師。掩其不虞可也。緩則遠矣。省日兼功上策也。於是晝夜進收所過人畜。至雙河。

弓月に就いての考

與彌射步眞會。軍飽氣張。距賀魯牙二百里。陳而行抵金牙山。賀魯衆適獵。定方兵縱破其牙。俘數萬人。獲鼓譟器械。

〔C〕賀魯跳度伊麗水。

〔D〕嗣業次千泉。

〔E〕彌射至伊麗。舊唐書伊麗水處月・處蜜諸部皆下。

次雙河。賀魯先以步失達干據柵戰。彌射攻之。潰。

〔F〕定方追賀魯至碎葉水。盡奪其衆。

〔G〕賀魯・咄運將奔鼠麴設至石國蘇咄城。馬不進。衆饑。齎寶入城。且市馬。城主伊涅達干迎之。既入。拘送石國。會彌射子元爽與嗣業兵至。取之。

以上の七項（勿論便宜上の分類にすぎない）を他の三傳と比較すれば、即ち次の表が得られる。

新唐書賀魯傳 A B C D E F G
舊唐書賀魯傳 C D E F G

新唐書蘇定方傳 A B

G

舊唐書蘇定方傳 C

G

説明を加へるまでもないが、右の二表を對照してみると、A Bの二項は新唐書の編纂に際して新たに得られた史料である。そしてEは阿史那彌射等流沙道安撫大使の行動を録したものであり（舊唐書による）とFもまたさうである、A D Gは蕭嗣業等の追討軍の記録である。元來一貫すべき敘述のうちに錯綜を生じてゐるのはこれが爲めであつて、雙河・伊麗水の名が再出してゐるのもまたその結果である。然らば新唐書のかくの如き配列は果してそのまゝ信ずることができらうであらうか。

あらゆる方面から見て、解決の端緒は先づF項に得られる。一體この項はEと共に阿史那彌射に關する記録から抽出したものであるらしい。それは舊唐書のこの項に相當する一節に、

〔彌射〕又與蘇定方攻賀魯於碎葉水。大破之。

とあるからで、新唐書はこれを改作したのであらう。それは兎も角として、この一節から知られるのは、(イ)雙河に於いて本軍と會した(B項)所の彌射の軍が、少くとも碎葉水(Suyab)即ち今の Chu 河までは蘇定方と一致の行動を取つたこと、(ロ)記録に見はれた限りに於いて、碎葉水畔こそ蘇定方と賀魯との最後の交戦地であつたこと、などであらう。

斯く碎葉水で實際賀魯と蘇定方(及び彌射・步眞等)とが兵馬を交へたとするならば、A項に記された追討軍の派遣は必ずやその後に行はれたに違ひなく、現に、その西に接した千泉には蕭嗣業が次した(D項)と明記されてゐるのである。且つC項に相當する舊唐書蘇定方傳には、

略^上定方追之。復大戰於伊麗水上。殺獲略盡。賀魯及咥運十餘騎逼夜亡走。定方遣副將蕭嗣業追捕之。至於石國擒之而還。

とあつて、追討軍の發途を少くとも伊麗水の戦以後

に繋げてゐるが、この後半文は碎葉以西の戦況を示すものといふべく、當にF項の後に挿入さるべきであつて、ADまた然りである。かゝる理由の下に新唐書の配列はまづ、

B→C→E→F→A→D→G

の順序に正されねばならぬであらう。因みにA項にいふ邪羅斯川は多羅斯川 (Talas) であつて、千泉と石國の中間に位し、石國がアラビア人の ⁹²⁾ ⁹³⁾ ち今の Tashkend に當るのは申すまでもないが、G項に見える蘇咄城は Chavannes 氏が教へてゐる如く、⁽⁹²⁾ Ibn Khurdādhbih の傳へた Shahrkakh 即ち Tashkend から 5 fars 離れた處である。

斯くして問題の範圍はBCE Fの四項に極限される。そして前に考へておいた所を應用すれば、BCは伊麗道行軍の記録、EFは流沙道安撫大使のそれであり、且つFは兩行軍の終結を示すものであるから、新唐書のこの配列から生れるものは結局次の二

つの進路である。

(a) B C F「伊麗道行軍」↓雙河↓金牙山↓伊麗水

↓碎葉水。

(b) E F「流沙道行軍」↓伊麗水↓雙河↓碎葉水。

所謂雙河問題はこゝに因由する。前者の根幹をなすのは「B↓C」といふ配合であつて、これに依ると雙河は伊麗水以東になるが、流沙道行軍の行程は「伊麗水↓雙河↓金牙山↓伊麗水↓碎葉水」となつて、伊麗水の再出を如何に解すべきかの問題を伴ひ、また反對に後者即ちEに見えた順路に従ふと、雙河は伊麗水以西に在つたことになり、同時に新唐書の史料の順序を「C↓B」に訂正しなければならなくなるのである。

さて右の相容れぬ二つの所傳に於いて、いま先づ前者の逆、即ち「C↓B」⇐Eの場合から案ずると、雙河及び金牙山に於ける兩軍の活動(B)は、伊麗水上に矛戟を交へたC)直後の事件となるべきである

から、伊麗水の戦に就いて傳へる所の比較的詳しい前引舊唐書蘇定方傳の一節に「復大戰於伊麗水上。殺獲略盡。賀魯・啞運十餘騎逼夜亡走」と見られるやうな慘敗を得た賀魯が、幾くもたゝぬうち、續うて金牙山に於いて再び破られるまでに、「俘數萬人」(B)と記録に残される程の勢力に復してゐたか、どうか、甚だ疑はしいのである。一方唐軍の側からいへば、雙河に到着する前、兩軍とも伊麗水を渡つたことになるから、蘇定方が大雪のために休息を請うた部下を諭して、「虜恃雪方止舍。謂我不能進。若縱使遠遁。則莫能禽」(新唐書蘇定方傳)といつたやうな、味方の情勢を無視した言は出ない筈である。況んや流沙道行軍の方が彼等よりも雙河に先着してゐるに於いてをやである。

安撫を目的とした流沙道行軍の一行が、雙河に於いて本軍に合する以前、後に蘇定方と賀魯との間に於ける激烈な戦闘場裡に化した伊麗水を經過したこ

とすら、E項それ自身の有する矛盾を思はせてゐるが、更に注意しなければならないのは、彌射等が賀魯と定方との戦に直接關係を持たなかつた處月部(Urunchi)及び處蜜部(Mannas)の降を伊麗水で容れてゐることに對する地理的方面からの不合理である。こゝに至つて私は思ふ。恐らくE項の頭初に「彌射至伊麗。處月・處蜜諸部皆下」とあるのは、A項の直ぐ前の文に處木昆部の附近に於ける賀魯の大敗が十姓に齎した結果を示して、

五咄陸〔部〕聞賀魯敗。趨南道降步眞。

と傳へてある一句に符節を合すべきもので、編者は既にこの句に於いて咄陸五部の來降を記したが爲めに、E項では五部のうちに含まれない部名をのみ掲げ、他を略して「諸部」としたのであらう。而かも咄陸の五部が賀魯の下を脱して彌射・步眞の軍に至つたに反して、處月・處蜜の兩部の降伏は行軍經過の結果に違ひあるまいから、結局する所、西州 Kara-

khodjo を發した流沙道安撫大使の一行は、Tum-chi (處月) Mannas (處蜜) の兩地方を経て西進し、雙河に至つて賀魯の部將の率ゐた防禦隊を撃破し、やがてこの地に到着した本軍を迎へたのであらう。然らばE項は「至伊麗「水」」の文字あるが爲めに、編纂に際してB項より後に配されたのであらうが、戦役の經過から云へば、寧ろその直前に記さるべきものであつて、問題の三字（舊唐書では四字）は衍字とするか、然らずとするも至は指、或は向に改められねばなるまい。従つて以上を前記新唐書から引いた七項のテキストの配置に及ぼせば、即ち次の如き最終的改正を見るのである。

$E \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow F \rightarrow A \rightarrow D \rightarrow G$

かくの如くして雙河在伊麗水以西説の牙城はその根幹に於いて動搖を來したことゝ信ずる。が、私は最後に最も有力な一證據を舉げて、雙河 Borotala 説を支持しようと思ふ。

既に本章の初めに觸れておいた如く、阿史那賀魯の西走直後に於ける彼の領内統治を傳へた舊唐書の一節には「建牙于雙河及千泉」と書いてある。この二つの牙庭のうち、千泉は前掲D項に相當する舊唐書賀魯傳の文に、

嗣業至千泉賀魯下牙之處。

と明示されており、そして蘇定方自身はこの地に至らなかつたのである。すると舊唐書蘇定方傳が、處木昆部に於ける交戦の記事に續けて、いきなり不用意にも、

唯賀魯及咥運率其牙内餘衆而奔。定方追之。復大戰於伊麗水上。殺獲略盡。

といふ獨立の一文を掲げ、賀魯が伊麗水に遁逃する以前、蘇定方によつて撃破されるに至つたところの彼の牙庭の存在を推測せしめてゐることこそ見遁してはならない。即ちその書き方から見ても、前半文を脱したことの明かな舊唐書の如上一文は、恐らく

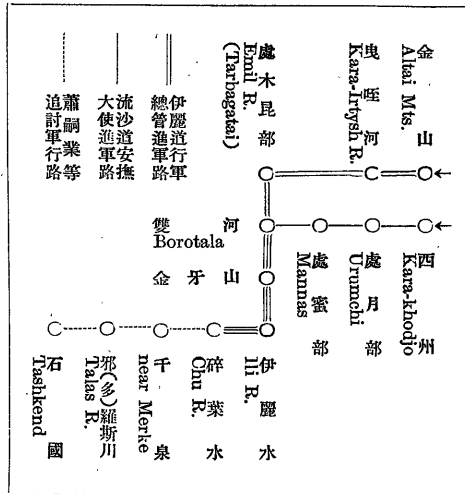
新唐書のB項に記された戰鬪の結果を告げたものであらう。⁽⁷⁸⁾換言すれば、雙河に至り、彌射及び歩眞の軍と會して意氣大いに昂つた蘇定方の一行が、更に二百里（蘇定方傳には百里となつてゐる）を進んで後、その虛を突いて破つたと書いてある賀魯の牙は、實際舊唐書におぼるげ乍ら示されたものに同じであるに相違ない。従つて千泉以外の一牙は伊麗水、以東にあつたことを明かにすると共に、なほ一步進んで、それは少くとも蘇定方遠征當時は雙河ではなくて、この地と伊麗水との中間に位すべき金牙山の附近であつたことを知るのである。なほ舊唐書は賀魯傳及び蘇定方傳の孰れに於いても金牙山の名を擧げてゐないけれど、同書^{卷一}九^五廻紇傳には、

顯慶元年賀魯又犯邊。詔程和節・蘇定方・任雅相・蕭嗣業領兵并廻紇。大破賀魯於陰山。再破於金牙山。盡收所據之地。西逐至邪羅川。賀魯西奔石國。下略。

とあり、賀魯對唐軍の勝敗を決定的ならしめた地として掲げられてゐる。文中の陰山に於ける最初の交戦は、處木昆部附近のそれを指すから、陰山は恐らく Tarbagatai 山に宛つべきであらうし、邪羅川はA項にいふ邪羅斯川で、即ち多羅斯 (Talas) 川である。また再度の交戦の結果、唐軍が盡く「所據之地」を收めたと書いてゐるのは、金牙山に於ける牙帳を破られた賀魯が、周章して西に奔り、遂に伊麗水上で「殺獲略盡」くされ、纔かに身を以つて脱出した程、悲慘な運命をたどつたと考證した前述の情勢と一致するものである。

以上唐の第三次阿史那賀魯討滅役に就いて、蕪雜ながら多少委曲を盡してみたつもりである。そこで全體の結論は次の表に譲り、直ちに當面の問題に對して得た所を述べると、それは阿史那賀魯がその勢力の樞軸として保有してゐたのは金牙山で、而かもこの山は Borotai (雙河) から伊犁盆地に通ずる

孔道の通過する Borokhoro 山脈の一部であつたと
 することであつて、従つて弓月城を中心とした突騎
 施部の疆域、換言すれば Talki, Kulja の兩城に



よつて代表される伊犁九城の地方が彼の最も重要な
 る根據であつたこと、殆んど疑を容れないのである。
 されば永徽二年に於ける唐の第一次阿史那賀魯征討
 に際して、その將帥となつた梁建方や契苾何力が何

弓月に就いての考

が故に弓月道「行軍」總管を稱したかといふ疑問は
 こゝで初めて氷解するであらう。

五

弓月城の名は唐史にもう一つ見出される。即ち舊
 唐書^{卷一八五}良吏傳上に收められた王方翼の傳に、

永隆中。「阿史那」車簿反叛。圍弓月城。「王」方

翼引軍救之。至伊麗河。賊前來拒。因縱擊大破
 之。斬首千餘級。俄而二姓咽薟悉發衆十萬。與

車簿合勢以拒。方翼屯兵熱海。與賊連戰。下略

とあるのがそれである。同じ事實は新唐書^{卷一}王方

翼傳にも掲げられてゐるが、永隆中^{西紀六八〇}を永淳初

に、二姓咽薟を三姓咽薟に改めてゐる。舊唐書^{卷八}

裴行儉傳には、

永淳元年。十姓僞可汗車簿反叛。詔復以「裴」行

儉爲金牙道大總管。率十將軍以討之。師未行。

其年四月。行儉病卒。年六十四。

として同じく阿史那車薄(簿)の反を傳へ、且つ新舊兩唐書の高宗本紀や冊府元龜^{卷九}八六征討篇五など、何れも同様、永淳元年(西紀六八二)に繫けてあるから、これらに依つて新唐書の改訂は認容さるべきである。殊にこれらの諸所傳に据ると、

〔永淳元年四月〕辛未。以裴行儉爲金牙道行軍大總管。與將軍閻懷旦等三總管兵分道討十姓突厥阿史那車薄。行儉未行而卒。安西副都護王方翼破車薄咽麁。西域平。舊唐書高宗紀及冊府元龜征討篇

などとあつて、王方翼の遠征が明かに裴行儉の死後であるに於いては尙更である。そしてこゝでまた特に注意を要するのは遠征の當時王方翼が安西副都護であつたといふ傳へである。彼はこの遠征の二三年前、恐らく調露元年に裴行儉が安撫大食使となり波斯王子を本國に送還するを名として十姓可汗の阿史那都支及び李遮旬を討つた時、安西都護を檢校し、そして戦後、碎葉に鎮城を築いて本據としたのであ

る。然るに新唐書王方翼傳によれば、彼の碎葉築城の記事と車簿征討の記事とを結びつけるのに、

未幾。徙方翼庭州刺史。而〔杜〕懷寶自金山都護更鎮安西。遂失蕃戎之和。

といふ一文を以つてし、車簿征討役に際して彼が庭州刺史であつたやうに傳へてゐる。けれども事實はさうではなくて、杜懷寶が「蕃戎之和」を失してのち、代つて彼が再び安西副都護に轉じたものと考へられる。

永淳元年阿史那車簿の反に際し、既に彼が安西副都護であつたとすると、本國に於いて計畫された一大征討軍が、總管裴行儉の死去によつて支障を來した結果、獨力蕃賊に對するに當り、王方翼が嚮きに自ら築いた碎葉の鎮城を根據としたことは推察するに難くない。果してさうだとすると、弓月城を救ふために碎葉城を發して東進した彼の軍は、まづ伊麗河に於いて車簿の防禦軍を擊破したけれど、この河

の下流方面に住んでゐた咽麁が車簿に結んで彼の不意を衝いたので、弓月城に向ふことが出来ず、遂に熱海の附近に退き、此地方で蕃敵を粉碎して大勝を博したのであると解釋しなければならぬ。

然し乍ら、かやうな経過はさて置いて、我々が如上阿史那車簿の反亂に關する一切の記録を通覽して頗る注意を惹かれるのは、この際に賊の攻圍に陥つた弓月城を救ふため、その地に赴かうとした裴行儉が金牙道行軍大總管を稱したことである。但し新唐書裴行儉傳には今牙道に作つてゐるが、何れにしても同音である。同時にこれに聯關して直ちに想起されるのは、かの顯慶二年に於ける唐の第三次阿史那賀魯征討役の記録のうちに（前章B項）、

距賀魯牙二百里。陳而行抵金牙山。賀魯衆適獵。
〔蘇〕定方兵縱破其牙。

とある一節であらう。而かもこの金牙山は前章で案じた如く、雙河（Borotala）から伊犁九城地方に通

弓月に就いての考

ずる孔道に當り、弓月城とは密接なる關係にあつたのであるから、この山と裴行儉の金牙道との結合は必ず許さるべきであると確信する。即ち裴行儉の稱號に見はれた金牙或は今牙と、阿史那賀魯の牙のあつた山名としての金牙は、共に或る同じ突厥語を寫したものに違ひない、と私は思ふのである。

更に元の耶律鑄の撰に成つた雙溪醉隱集を繙くと、卷二「樂府」のうちに「婆羅門六首」が記されてゐるが、その第五首に、

弓月山風長似箭。燭龍軍火亂如星。

祇除盡挽天河水。可洗兵塵戰地腥。

とあつて、こゝに弓月山の名を見出す。而かも撰者自身これに註して、

北庭都護府有瀚海軍。本燭龍軍也。府境有弓月城。弓月山是謂弓月道出兵路也。唐梁建方嘗爲弓月道總管。

といつてゐるのを見ると、この弓月山は、位置に於

いて前述の金牙山と全然吻合するのみならず、その音聲もまた殆んど同じである。然らば金牙、今牙、弓月は恐らく同一突厥語に對する異譯にすぎないのであらう。

さて耶律鑄は弓月山が弓月道出兵路に當つてゐたと説いてゐる。屢々述べた如く、梁建方や契苾何力に率ゐられた弓月道行軍は、弓月城方面に於ける阿史那賀魯討滅を目的として西に向ひ、Urumechiの附近でまづ處月部を破り、更に Mannas 地方で處密(處蜜)部を降したのであるが、その最後の目的は達し得ないで本國に歸つたのである。さり乍ら、かやうな目的とその經過から案ずるならば、彼等の一行が辿らうとした進路は直ちに了解することができ。即ち Urumechi から Mannas を經て西のかた伊犁九城の地方に向ふ道——換言すると、唐の庭州輪臺縣から清鎮軍城を經て弓月城に至る、所謂碎葉路の一部こそそれであつたに相違ない。そして新唐書

地理志の註にこの孔道を述べてある一節によると、
渡石漆河。踰車嶺。至弓月城。

とあつて、弓月城に達するには必ず車嶺といふ山を越えたと書いてある。然らばこの車嶺こそ總べての點から見て、耶律鑄の傳へた弓月山、即ち唐史にいふ金牙山に相當しなければならぬ。

嚮きに私は弓月部族の名稱を問題に掲げて(第一章)、單にその音聲の上からいへば Kangar 及び Kangli の孰れにも宛てられるが、殊に Kangli (康里)に比する時は、その住地から見ても武斷でないことを述べておいた。いまこゝに至つて再び Ras-hid-ed-Din や Abul-Ghazi の所傳を搜るならば、兩者とも筆を揃へて Kangli 部族の名號をば車の意味と説明してゐるのを指摘できる。但しこの部族名の起原に關する兩史家の敘述が、同じ種類に屬せる Uigur, Kypchak, Kalach, Karluk などの諸族名に對する etymology と共に、かの オグ・カン (Oguz

Khan) 傳説によつて多分の潤色を受けてゐることは否みがたい。けれども、實際トルコ系統の諸言語から推して、Kangai なる語に與へた彼等の解釋が決して虚構でなく、寧ろ正鵠を得たものであることは既に白鳥博士の證明せられたところである。⁷⁹⁾

然らば何故唐書地理志は弓月(金牙)といふ名を持つた一山を車嶺と書いたのであらうか。思ふに車嶺は即ち弓月山・金牙山の義譯であつて、弓月城とは車城の意に外なるまい。

以上の論證に大過なしとすると、かくの如き城名や山名と同じ文字、同じ發音を以つて寫された名號を持ち、而かも西突厥五弩失畢部の一姓に數へらるべき弓月部は、當然元時に於ける康里(Kangai)部族の前身と思はれるのである。況んや唐會要の示す如く、唐代既にこの部族の存在を、全く違つた方面からも明證し得られるに於いてをやである。

私の導き得た貧しい結論は即ち斯の如くである。

弓月に就いての考

最後に少しばかり蛇足を加へることを許されたい。既に問題の弓月部が唐の高宗の頃 Issyk-Kul から Zhetysay 河の方面に占據してゐたこととすると、伊犁九城の地に築かれてゐた弓月城とは、同じ名稱を持ち乍ら、その方位に於いて異つてゐたこと申すまでもない。しかしかやうな特殊な文字を以つて寫された名稱上の符合を尊重するならば、兩者の間に何等か隠れたる歴史的關係があつたと想像しても敢て無稽の言として斥け去るわけにもゆかないであらう。且つ唐の中宗・玄宗の頃碎葉地方を中心とした突騎施部が、もと西突厥の盛時には伊犁盆地に居たといふ史實から類推して臆度すれば、或は弓月部もまた伊犁河の流域から南遷したのであつて、弓月城・弓月山の名稱もこれに因むものであるかもしれない。

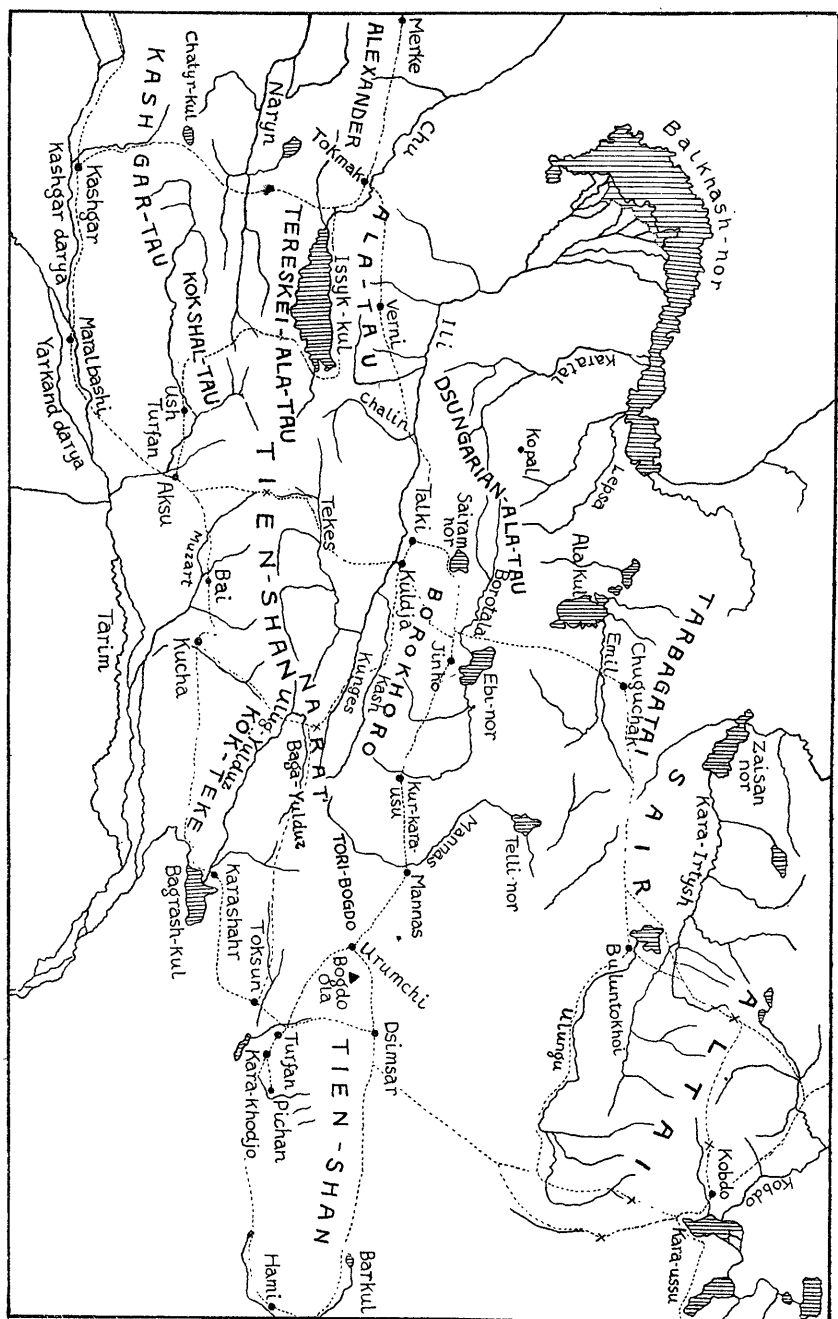
一方、若し眼を轉じて元史^{卷一}三〇不忽木傳を繙くならば、まづ最初に「不忽木^{三〇}一名時用。字用臣。康里

部大人」とあつて彼の素性が記してあり、次に恐らく彼等康里人の傳へた口碑に據つたらしいところの「康里部漢高車國也」といふ文字の見えるのに氣が附く。元史譯文證補^{四卷二}に附録された康里補傳に於て、著者洪鈞氏はこの一句を指摘し、なほ拉施特(Rashid ed-Din)阿卜而嘎錫(Abul-Gazi)の記録を參看して、元の康里部を「古の高車の後」と斷じてゐる。これも單なる一個の假説であるから、直ちに信じがたいではあらうし、且つ朔方西域方面に於いて、古來車を意味する族名や國號はなほ他にも求め得られもしようが、兩者を比較すると、その語の意義ばかりではなく、音聲の點でも明かに一致を見るのである。されば私をして、いま洪鈞氏の假説に従はしめるならば、北魏の頃の高車部は即ち唐代の弓月部、即ち元の康里部といひたいのである。以上の二つの臆測に加へるに、拓跋氏の國が北支那に強を誇れる頃、漠北 Selenga 河の流域にあつた高車が

蠕蠕(柔然)に叛いて西に移り Dzungaria に疆を拓いたことや、また Kangji 族は蒙古時代にキルギス曠野に占據してゐたが、その以前は Talas, Chu 兩河の地方に游牧してゐたといふ Abul-Gazi の所傳、などを以つてすれば、Kangji (康里)族の沿革も辿り得ぬこともなく、従つてトルコ民族移動の歴史にも多少の寄與を齎すことが出來よう。けれども私の非才に加ふるに記録の僅少のために、この大問題^(註)を解くのに最も必要とする證據を舉示し得ぬ今日の狀態では、なほ未だ微々たる臆説の範圍を出ないので洵に遺憾とする。(昭和四年十一月二日史學會大會・東洋史部會にて)

註

- 1 舊唐書(卷五)高宗本紀、咸亨元年の條に「夏四月。吐蕃寇陷白州等一十八州。又與于闐合衆襲龜茲撥換城。陷之。罷安西四鎮」と記してゐる。新唐書(卷三)はまた同年四月癸卯に繫けてゐる。安西都護府はこゝに至つて廢止されたのであるが、勿論一時中絶したまでにすぎず、德宗の貞元年間まで命脈を保つたのである。



2 資治通鑑唐紀(卷二〇一)龍朔二年十二月の條。

3 新唐書(卷三)高宗本紀、龍朔三年十二月の條に「壬寅。安西都護高賢爲行軍總管。以伐弓月」とあり、資治通鑑(卷二〇一)は末尾の一句を「將兵擊弓月。以救于闐」と改めてゐる。

4 新唐書(卷三)高宗本紀、麟德二年の條ではたゞ「是春」と書き起してゐるが、同じ傳へを改めた資治通鑑(卷二〇一)及び冊府元龜(卷九九五)交侵篇は「三月間」の事件としてゐる。

5 以上の四資料のほか、舊唐書(卷七七)韋待價傳によれば、彼が則天武后の垂拱年間に安息道行軍大總管として吐蕃征討に向つたことを記して「罪至寅識迦河。與吐蕃合戰。初勝後敗。又屬天寒凍雪。師人多死。糧餽又不支給。乃旋師弓月。頓於高昌」とあり、文中にまた弓月の名を見出す。

6 隋書の得羅海をヒルト氏は羅海と讀んで、*“vielleicht des Caspischen Meer”*と説いた。(F. Hirth, *Nachwort zur Inschrift des Tonjukuk*, s. 37.)けれどもこれは確かに誤りて、白鳥博士やシャヴァンヌ氏の解釋に従ふべきである。白鳥庫吉博士「烏孫に就いての考」第三回(史學雜誌十二編二號) p. 144 及び Ed. Chavannes, *Documents sur les Tou-kine occidentaux*, p. 123 note.

7 西域聞見錄・皇輿西域圖志などを参照したシャヴァンヌ氏の弓月に就いての考

所説によつて (Chavannes, *Tou-kine occidentaux*, p. 270 et n. 1.)

8 舊唐書(卷一八五)良吏傳及び新唐書(卷一一一)王方翼傳。この戰役に就いては本論第五章の初めて觸れておいた。

9 Isyk-Kul から南すれば Tereskei Ala-tau を越えて Syrdarya の上流、Karyn 河畔に至る。更にこの河及びその一支たる Ab-bashi 河を横斷して Chalyr Kul 湖岸に出づ。南に進んづ Kaspgar tau を越え Toyun 河に沿つて下ると Kaspgar に達するのである。徐松氏は伊犁河下流方面から天山南路に通ずる三道を敘した額敏和卓の奏議を引いてこの間道を指摘してゐる(西域水道記卷四、四〇丁)。また鶴梁氏は四陣要略(卷一)の「南北兩路山水總敘」に於いて同じくこの道を記してゐる。なほこの間道が突厥と疏勒(Kashgar)とを結びつけたことは既に考へておいた。「西突厥王庭考」第四回(史學雜誌四十篇四號) p. 47c.

10 阿史那賀魯平定の際、阿史那彌射は唐の冊立を受けて興昔亡可汗毘陵都護となり、五咄陸部を安輯し、阿史那步眞は同時に繼往絶可汗淩池都護として五弩失畢部を領した。そしてこの文に見えた阿悉吉部が明かに弩失畢部五姓の一であつたからである。

11 この表文の簡略は唐書西突厥傳、突騎施蓋祿の條下にも見出される。

12

新唐書（卷五）玄宗本紀の開元二十七年の條に「八月乙亥。磧西節度使蓋嘉運敗突騎施于賀邏嶺。執其可汗咄火仙」とある。またこの戰役について傳へる所最も詳しい冊府元龜（卷三五八）將師部立功篇（十一）にも「蓋嘉運爲磧西節度使。開元二十七年大破突騎施于碎葉城之東賀邏嶺。擒可汗咄火仙及葉護特勤及弟撥斯云々（下略）」と書いてある、これらの記錄にいふ所の賀邏嶺は賈耽の皇華四達記（新唐書卷四三下・地理志要錄するところ）の一節に「五十里至熱海。又四十里至凍城。又百一十里至賀城。又三十里至葉支城。出谷至碎葉川口。八十里至裴羅將軍城。又四十里至碎葉城」とあるうちに見出される賀城であらうから、碎葉城を東に去ることさまで遠くないのである。

13

但し舊唐書（卷一九四下）西突厥傳の沙鉢羅咥利失可汗の項では「五咄六部落居於碎葉已東。五弩失畢部落居於碎葉已西」として、兩部の界を碎葉と傳へてゐるが、その後文に沙鉢羅咥利失・乙毗咥陸の二可汗が國內に對立した際兩者相約して伊列河（伊犁河）を以つて界としたことが見え、また突騎施部が碎葉に移る前伊麗河に居た（後述）ことなどから案ずると兩部は伊麗河（今の Chaiin 河の注ぐ附近の伊犁河）を以つて東西に分つの妥當を覺える。

14

兩唐書西突厥傳阿史那賀魯の項。この項には咥陸の五姓として盧木昆、胡祿屋、攝舍提、突騎施、鼠尼施と數へ、各部を

代表した五人の噉（Chur）の名を擧げてゐるが、五弩失畢部に於いては「弩失畢有五俟斤。一曰阿悉結闕俟斤。最爲強盛。二曰哥舒闕俟斤。三曰拔塞幹咄沙鉢俟斤。四曰阿悉結泥孰俟斤。五曰哥舒處半俟斤」とあつて、阿悉結及び哥舒の兩部が夫々二人の俟斤を出してゐるからである。但し舊唐書（卷一〇四）哥舒翰傳には「哥舒翰突騎施首領。哥舒部落之裔也」とあつて、哥舒は咥陸部の突騎施と密接な關係にあつた如く記されてゐるが、勿論突騎施南遷（後述）後の關係にすぎない。

15

トムセン氏の佛譯に於て。Vilh. Thomsen, Inscriptions de l'orkhon déchiffrées, p. 110.

16

J. Marguart, Die Chronologie der alttürkischen Inschriften, s. 9-10 及び W. Barthold, Die alttürkischen Inschriften und die arabischen Quellen (Die alttürkischen Inschriften der Mongolei, von W. Radloff, Zweite Folge 所收) s. 12-14. など。

17

E. Bretschneider, Mediaeval Researches, Vol. I, p. 223. 「是歲（A. D. 1144）粘拔思君長撒里雅賓特率康里部長等

18

古・及戸三萬餘求內附」

19

元史卷一三〇から卷一三六にかけて、康里人にして倅が見出されるもの七名を數へる（Bretschneider, op. cit. Vol. I, p. 302-3）那珂通世博士は成吉思汗實錄續編の

- 「歴史に見えたる名田」の項に康里人九名を擧げてゐる（那珂
圖書報 p. 106-112）。Kangli はたゞ元朝 康里 の漢語と考
へて 康里 の譯名といふ（卷十三）が、名田の註を參照し、
26 Abulgasi-Bayadur Chan, Histoire genealogique des Tar-
tars. p. 41: W. Radloff, Das Kudsakn Bilik. Bd. I,
Einleitung, s. XIX und s. XXXII: Elias, A History
of the Moghuls of Central Asia. p. 15-16 及び Breisch-
neider, Mediaeval Researches. Vol. I, pp. 227, 229, 23
27 The Texts and Versions of John de Plano Carpini
and William Rubruquis. (Hakluyt Society) Latin Text
pp. 97, 170. Hakluyt Version, pp. 132, 216.
28 萬壽錄 (卷 11) 萬壽錄十六の頁。
29 M. Schlegel, The secret of the chinese method of tran-
scribing foreign sounds. (Young Pao, Ser. II, Vol. I)
p. 37: O. Franke, Beiträge aus chinesischen Quellen
zur Kenntnis der Türkvolker und Strythen Zentral-
asiens. s. 23.
30 F. Hirth, Chinese equivalents of the Letter "R" in
foreign names. (Journ. of the China Branch of the
Roy. Asiat. Soc., Vol. XXI, p. 214: Hirth, Nachworte
zur Inschrift des Tomjuk, s. 6.
31 可汗た就くといふ名
32 白鳥庫吉博士「西域史上の新研究」第一回康居考（東洋學報
第一卷三號）p. 330.
33 Histoire genealogique des Tartars, traduite de Man-
script Tartare d'Abulgasi-Bayadur Chan. (1726 版)
pp. 85-86, 及び萬壽錄の卷四「Carte de l'Asie septen-
trionale dans l'estat où elle l'est trouvée du temps de
la grande invasion des Tartares dans l'Asie me-
ridionale sous la conduite de Zingis Chan」を參照せよ。
34 白鳥庫吉博士「西域史上の新研究」第一回康居考（東洋學報
第一卷三號）pp. 329-330. 同博士の康居即カンガル説は
「聚特國考」にも再説をいひてゐる（東洋學報第十四卷四號
pp. 461-463）。
35 Breischneider, Mediaeval Researches, Vol. I, p. 304.
36 田中「De Guignes 及び Menander Protector の記載に見
ゆる "Chitane" (C. Müller, Fragmenta Historiarum
Graecorum. IV. p. 229) と Kangli の比較」は、
別問題といふ。
37 舊唐書突厥傳などには、東突厥の始畢可汗に屬した「康利
といふ特勤 (Tigin) の名を傳へてゐる。ハーカー氏はこれを
大膽にも Kangli と讀んでゐるが、音聲上の不都合を免れ
なく (E. H. Parker, A Thousand Years of the Tartars.

2nd Ed. p. 196.)

30 洪鈞「元史譯文證補」卷二十四に附載された康里補傳。

31 W. Radloff, Das Kuitaku Bilk, Theil I, Einleitung, s. VII.

32 G. Schlegel, La stèle funéraire du Teginh Giogh et ses copistes et traducteurs chinois. p. 32.

33 Chavannes, T'ou-kine occidentaux. p. 31, n. 3.

34 白鳥博士も古くはこの説を探られたやうであり、丁謙氏また同じ理由の下に「在今巴里坤東北三百餘里。尼赤金山南驛路間」と推定してゐる。「突厥闕特勤碑銘考」(史學雜誌第八編十一號) pp. 1118-1119. 丁謙氏の説は浙江圖書館叢書第一集所收の新唐書突厥傳地理攷證(十六丁)に見えてゐる。

35 元の耶律鐸は「今華夏猶呼沙漠爲沙陀。突厥諸部遺俗至今亦呼其積鹵爲朱邪」と述べ、次いで處月の名はその酋長朱耶孤注の朱耶(朱邪)と同じで、古の涿邪の訛轉であるから、沙陀、處月は共に積鹵の意であると説明し、兩者の關係を認めてゐる(雙溪醉陰集「卷二・樂府・涿邪山」の原註)。

36 皇輿西域圖志(卷二・山二)哈屯博克達鄂拉的條。

37 圖志は新唐書西突厥傳に處月・處密が「圖天山」とあるによつてこの比定を導いた。蓋し天山は Urumchi の東 Bogdo Oia なるがためである。けれども新唐書の典據となつた舊唐書西突厥傳の文は前に引いた如く「又遣處月處密等圖天山縣」

であつて、明かに今の Turfan の西 Toksun に宛つらるべき西州天山縣と記されてゐるが如くである。

38 例へば前に掲げた如く圖志卷二十一では Bogdo Oia の北邊と解したにも拘はらず、卷九(疆域二)乾瀋の條ではこれを Guehen の東、奇臺縣に宛てた。斯く處月の住地に對して一定した解釋を與へてゐないのである。

39 註三三參看。

40 輪臺縣は元和郡縣志(卷四〇庭州)によると「長安二年(西紀七〇二)置」といはれてゐる。然らばこの年を遡ること約四十年以前に府に昇格した金滿州が、設置の頃輪臺縣に隸したといふのは奇妙である。また元和郡縣志の同じ項には輪臺縣の位置を示して「東至州(庭州金滿縣)四十二里」とある。

王國維氏は太平寰宇記に據つて、これを四百二十里と改めてゐる(「長春真人西遊記註」卷上)けれど、若しも志の所傳を正しいとすると、これこそ金滿州と輪臺との關係を解決するに重要な一句といはねばならない。

41 羅振玉氏の編した「沙州圖經」の卷末に影印が附録されてゐるし、「敦煌石室遺書」のうちには活字にして收めてある。史學雜誌第二十一編一號にも敦煌發掘古書の其一として一部寫眞版になつてゐる。

42 宋史(卷四九〇)外國傳、高昌の條に引かれた「王延德使高昌記」。

43 皇輿西域圖志、卷二三(山四)金嶺の條。

44 隋書(卷八三)西域傳高昌の項及び同じく(卷八四)北狄傳鐵勒の項など。皇輿西域圖志(卷二)博克達鄂拉の條参照。

45 牢山の名は新唐書(卷二一七下)黠戛斯條にも見出される。

即ち黠戛斯(Ḫan)の阿熱がこの山の南に牙帳を徙したといひ、牢山亦曰賭蒲。距回鶻舊牙度馬行十五日」と説いてゐる。洪鈞氏は牢山の一名賭蒲を賭蒲の譌となし、これを同じ傳中に示された食漫山(元史の唐德嶺、今の Tannu Ola)に比してゐる(元史譯文證補卷二六下)。然らば處月の牢山とは勿論場所は違ふけれど、これを隋書の食汗山とした私見とは、相互の名稱上に面白い一致を告げるものといへやう。

46 新唐書(卷一〇)契苾何力傳による。

47 徐松「西域水道記」卷三・四十丁右。氏は單に「黑水者即三喀喇烏蘇之謂歟」とのみ説いてゐるが、嚴密に云へば同名の三河のうち最東に位する庫爾喀喇烏蘇(Kür-kara-usu)即ち奎屯河であらう。

48 徐松「西域水道記」卷三・四十丁左。

49 恐らくこの守捉は長春真人の昌八刺城で、元史にいふ彰八里(地理志西北地附錄)・昌八里(耶律希亮傳)・捺八里(李進傳)、西方の記錄に残れる Djambalekh (King Hailion) なるが故である。王國維氏の「長春真人西遊記註」卷上・三七丁を參看されたい。

50 後の清海軍。寶應元年(西紀七六二)更に改めて北庭都護府

管下の西海縣となつたものであらう。この問題に關しては他日何等かの折に叱正を仰ぎたいと思つてゐる。

51 徐松「西域水道記」卷四・三十九丁。

52 徐松氏は「石漆河或晶河之舊稱」と推測した。そしてこれを根據として晶河の發源する登努勒臺山を考慮に入れて、唐書の道程を「蓋即由登努勒臺至伊罕矣」と斷じにすぎない。「西域水道記」卷三・四十丁。

53 Chavannes, Documents sur les Tur-Kine occidentaux, p. 13.

51 この城に關した史料はブレットシュナイダー氏がよく集輯してゐるから參照されたい。(Breischneider, Mediaeval Researches, Vol. II, pp. 33-38)° なる Lerch 氏の如く、その方位を誤つて Venny に比した説はさておき、この城を大體伊犁九城の地域内に求むべきは疑のない所だが、的確な位置に至つては學者の間に意見の一致を見てゐない。さて Breischneider 氏は Zakhroff 氏から示されたところ、Snidman (綏定)城を七露里離れた古城市の廢址を傳へてゐる (Med. Res., Vol. I, pp. 66-70, note 172)° これは恐らく徐松氏が塔爾奇 (Tarki) 城の正北五里許に「垣墻の跡已に辨ずべからざる」程の破城ありと書いてゐる(西域水道記卷四・二九丁)ものと同者であらう。思ふに阿力麻里(阿里馬城)はこ

の邊に比擬すべきであらう。

55 蒙古史料四種所收の「長春真人西遊記註」卷上・三八丁。

56 四部のうち處木昆部及び鼠尼施部の位置は既にのべておいた。「西突厥王庭考」(史學雜誌四十編三號) pp. 34-36 並びに本稿の註7參看。他の二部の住地に就いては新唐書西突厥傳や地理志屬厥州の項に、攝舍提部に雙河都督府な、胡薩屋部に鹽泊州都督府を置いたとある以外には直接示された記録がない。従つて新唐書のこの比定が果して當時の實際と矛盾がないとすれば、皇興西域圖志(卷十)綏來縣治の條が前者を博羅塔拉(Borotla)に、後者を今今の額彬格遜澤爾(Ebin-gassun Nor, i. e. Ayar Nor)の南境と案じてゐるのに據ればならぬ。

57 顯慶二年、西突厥の阿史那賀魯が唐軍に虜獲せられた結果、突騎施部に對しては隴廬及び繁山の二都督府が設置された。これによつて南遷以前もなほ餘程廣汎な地域に亘つてゐたと想像に難くなく、且つ隴廬は恐らくトルコ語で大な意味する *Orda* の音譯であらうが、この二都督府の位置は現在のところ何とも推斷できない。

58 杜祐の通典、卷一九三(邊防・西戎)石國の條ひくところ。なほこの形勢は玄宗の天寶時代のことである。何となれば、通典卷一九一(西域總序)に「族子環、隨鎮西節度使高仙芝西征。天寶十載至西海」とあるからである。

59 通典(卷一七四)州郡、安西府の條にも同文があるが、たゞ廓沙を魔婆に作つてゐる。この廓沙・魔婆(正しくは魔婆)は隋唐の頃今の Yulduz を指した稱呼である。

60 「漢西域圖考」卷三・十五丁。なほヒルト氏はこの一句を“... worauf er ein grosses und ein kleines Ordn gründete, das grosse im Sui-yé-Thale, das kleine in der Stadt Kungyie am Ili-Fluss.”と譯したが、明かに誤讀である(Hirth, Nachwort zur Inschrift des Tonjukuk s. 76) 新唐書西突厥傳による。舊唐書は單に「進窺庭州」に作り、西州に對する記載がない。

61 「大唐西域記」卷一。「大慈恩寺三藏法師傳」卷二。但し慈恩傳では咀邏斯と書いてある。

62 「皇興西域圖志」卷二五(水二)。庫色木蘇克郭勒の條。

63 「辛卯侍行記」卷六・五七丁。

64 浙江圖書館叢書第一集所收。

65 丁謙氏は雙河の位置を推すに當り、まづ新唐書西突厥傳に、唐軍が雙河から二百里を進んで阿史那賀魯の牙所たる金牙山に至つた時、賀魯の衆が、適ま狩獵を行つてゐた。(同書蘇定方傳にも見ゆ)とあるに注目し、これを同書地理志に錄せられてゐる賈耽の皇華四達記に見えた賀羅城に附會して「攷地理志附錄。自北庭(安西の譚)至西城道。言辟業城東二里有賀獵城。即賀魯出獵處。知其時賀魯所居金牙山。實在特穆爾

圖泊 (Temutut Nor) 北濱。雙河又在東二百里。揆度地望。當即伊犁河西南所會之支流名撒勒克河者是」云々と説いたのである。言語同断と申す外ない。

76 舊唐書卷八三及び卷一九四下。新唐書卷一一一及び卷二一五下。また舊唐書(卷一九五)廻紇傳、冊府元龜(卷九七三)助國討伐篇、同(卷九八六)征討篇、資治通鑑(卷二〇〇)唐紀顯慶二年の項など参考に値する。

68 「西突厥王庭考」註六(史學雜誌四十編一號 p. 60) 参照。但し李光延氏は蘇定方が經た金山を金婆嶺(金嶺)と解し、高昌の北屏をなす天山山脈の一峰に宛て、蘇定方破賀魯於伊麗水。無由取道阿爾泰(Akai)山之北也」と説いた(漢西域圖考卷三所收の庫爾喀喇烏蘇沿革攷)。なるほど新唐書地理志(卷四〇)を見ると、西州が「開元中。曰金山都督府」であつたとあるから、必ずしも金山はアルタイ山に限るとしてしまふわけにはゆかないが、私は李氏の意見には絶対に反對である。一々同氏の誤解と武斷とを指摘するまでもないだらうが例へば(一)蘇定方の軍には廻紇婆閭の率ゐた廻紇兵が混じてゐたこと(二)唐都に滯留してゐた歌羅祿の酋長等がその軍に従つて歸國したこと(三)天山山北方面を經略安輯したのは別軍の阿史那彌射等て(四)蘇定方の本軍は處木昆部を指して進んだのである點等々から推してもその一端を知ることができよう。

巧月に就いての考

69 「皇輿西域圖志」卷二十五「額彬格遜淖爾の條」に「辛卯侍行記」卷六、五七下。なほ Chavannes は「Cette rivière n'a pu être identifiée」(Tou-kine occidentaux. p. 36, n. 4)と註してゐる。

70 Vllh. Thomsen, Inscriptions de P'ok'hon déchiffrées. pp. 110, 115 (L. E. 39, I. S. 3-4=II. N. 3) 著して p. 159, n. 49. 參照。

71 F. Hirth, Nachwort zur Inschrift des Tonjukuk. s. 6.
72 Thomsen, Inscriptions de P'ok'hon. p. 110: Radloff, Die alttürkischen Inschriften der Mongolei. Erste Lieferung, s. 21.

73 Chavannes, Tou-kine occidentaux. p. 306 (Addenda et Corrigenda)

74 蘇定方等が雙河に到着して、彌射や步真等と會したと傳へられてはゐるが、この時賀魯との間に兵馬を交へた形跡は認められない。これに反して流沙道行軍がこの地に到つた時、賀魯の將の步失達干に拒まれ、これを擊破してゐるからである。恐らく蘇定方の率ゐる伊麗道行軍が雙河に至つたのは、彌射等が步失達干の軍を敗退せしめた直後であつたらう。

75 舊唐書は伊麗水に作り、新唐書は單に「伊犁」と改めてゐる。これは新唐書の編者がこの記錄のもつ矛盾に多少心付いた結果であるかもしれない。

76 新唐書がB項をC項の直前に挿入したのはこれがためであらう。

77 「知服齋叢書」所收。婆羅門六首は卷二の十五丁に見ゆ。

78 Radloff, Das Kudaikun Bilik. Thel. I, s. XIX, s. XXII
及 Abulgasi-Bayadur Chan, Histoire genealogique des
Tatars, p. 41.

79 「西域史上の新研究」第一回、康居考（東洋學報第一卷三號）
p. 330.

80 ヒルト氏は新唐書（卷五）玄宗紀に天寶十載「七月。高仙芝
及大食戰于恒羅斯城。敗績。」とある一文を紹介した際、恒羅
斯なる城名を Kangis に宛て、これは城名としては知られ
てゐないが、蒙古時代の民族名として注意すべき由を述べて
ゐる。Fr. Hirth, Die Erfindung des Papiers in China.
(Chinesische Studien 所收) s. 269-270, n. 1. けれども恒
字は明かに恒(恒)の誤で、恒羅斯はアラビア人のいふ Tarsus
を寫した（今の Tarsus 河畔に擬せられる）ものであるから、
博士のこの説は全くの誤解にすぎない。

81 また續つて全然違つた立場から、洪鈞・ラドロフ兩氏の説く
所（註8031參看）に従つて、康居・康里の同一を認めれば、
Syr, Talas, Chu 三河の流域が如何に古くから Kangit 族
の據る所となつたかを知り得、兩者の連續的役割を弓月部族
に求めることがつきまつ。

高麗妙清の亂に就て（下）

瀬野馬熊

余輩は上篇に於て、此の變亂の發端から其の終
局に至るまでの全局を大別すると、事體は自ら前
後二段に分れることを述べた。即ち前段は妙清等
によつて企圖されたる遷都運動で、後段は最後の
大破裂たる西京の叛亂である。それで、前段から
後段に至るの推移と、そを運び行いた根本の動力
とも稱すべき西京の開京に對する反抗とに就て
は、既に上篇中に説き畢つたが、遷都運動の真相
と觀るべきものに關しては、未だ觸るゝ所が無か
つたので、本篇にては夫れに就て述べて見たいと
思ふ。然るに、余輩は此の篇の緒言に於て、變亂